昭和初期・東京における墓相の展開

――「正しい墓」のプロモーション

問　芝　志　保

1　はじめに

墓とはどのように建てるべきものなのか。この問いに、伝統宗教の教義は必ずしも明確に答えていない。そのため人々は死や霊魂についての観念だけでなく、遺体処理や都市計画といった実際問題とも向き合いながら、社会規範としての墓制を構成してきた。本稿は、昭和初期における墓相（墓相学）(1)の登場を、近代における時代社会状況の変化のなかで出現した、墓をめぐる新しい言説の一つと捉えて論じる。

墓相とは、墓の形状や状態がその墓を所有する家の運命に影響をもたらすと説く運命判断の一種である。墓相の専門家である墓相家は、文献や全国の墓地調査などによって得た独自の知見にもとづいて、墓の吉凶を判断し、その家に起こった災禍を言い当ててみせたり、彼らの提唱する「吉相墓」や「正しい墓」(2)の建墓を指導したりする。人相や手相、家相、印相、姓名判断などと同種の易占いであるが、「墓は家の根である」といった標語に表れているように、墓相は個人ではなく家の運命（家運）を問題にするという特徴をもつ。また、東アジア式の墓地（隠宅）風水(3)が地形の起伏、水流、方位などの地理的条件を重視するのに対し、日本の墓相は墓石の形状や彫刻、大きさ、配置を重視したもので、ほぼ日本独自に作り上げられたといえる(4)。戦前～バブル期に流行した後、今日では低調となったが、相変わらず墓相に関する書籍は刊行されている。日本の墓に関する言説として確かに存在してきたといえよう。

墓相は「先祖のタタリ」を強調して不安をあおる迷信などと批判されることもあり(5)、学術的な研究対象とされることは多くなかった。ただし、墓相の先駆をなした中山通幽（つうゆう）や松崎整道（せいどう）の思想実践に焦点をあてた研究は行われている。詳しくは後述するが、彼ら初期の墓相家は自家の墓を建てる前にまずは無縁墓や自分とは全く関係のない他者の墓の供養を実践するべきと説き、特に近畿以西で大きな影響力を持った。対馬路人は新宗教研究の立場から、

中山が明治 28 年（1895）に設立した新宗教「福田海（ふくでんかい）」を考察するなかで、墓相を「在家による独自の先祖供養を説く新宗教の興隆や水子供養の流行などとならんで、近代日本が生んだ民衆的霊供養文化の一つ」(6)と位置づけている。また土居浩は、1930 年前後に柳田民俗学、霊園行政、掃苔道など「墓をめぐる実践の同時多発現象」(7)が起こったと指摘し、そのなかに墓相をも位置づけている。さらには、中山や松崎の無縁墓供養実践を仏教社会事業や社会奉仕活動として捉えようとの試みもみられる(8)。

確かに中山や松崎が墓相の先駆者であることは間違いない。しかしここで注意したいのは、われわれが今日見聞きする墓相では、中山らが説いた無縁墓供養の要素が後退し、自家を繁栄させる墓を建てることにもっぱら重点が置かれるということである。また、先祖の供養のために墓の形状や状態を重視する墓相の発想は、同時期に隆盛した「霊の供養」を重視する霊友会系新宗教(9)などとも異なる。

現在につらなる墓相はどのように生まれ、普及に至ったのだろうか。本稿はその問いに対し、矢島俯仰という一人の墓相家に注目し、これまでほとんど取り上げられてこなかった文献資料と聞き取り調査にもとづいて検討する。

2　墓相の誕生

（1）前史――易と無縁供養

本稿末尾に掲載した年表は、近世以降から太平洋戦争終結までにおける主な墓相書の刊行状況を、現時において入手しえた文献資料をもとにまとめたものである。以下、年表内の文献を引用する際には「（年表・文献：頁）」の形式で表記する。

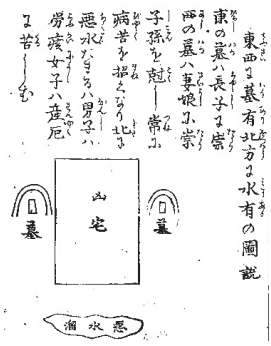


図 1（年表・平沢 1894）

まず墓相の前史をみよう。宮内貴久によれば、中国大陸から流入した易や運命判断は、室町期に大衆化が進み、18 世紀末頃からは家相見へと展開して、家相書が広く流通した。しかし、本来は家相（陽宅風水）の対となるべき墓相（陰宅風水）は、近世までほとんど流行らなかったという(10)。日本で世に出された最も早い墓相書としては、文政 3 年（1820）、高田與清による『墓相小言』（年表・高田 1806）が知られている。同書には、中国から伝来した墓相が古墳造営に反映されていることや、墓相の善悪が禍福をもたらすなどとあるが、具体的な墓相の記述はほぼない。明治中期の家相書の一部には、家と墓との位置

関係の吉凶に関する記載があるが（図 1）、その説は墓地風水の発想にほぼ近い。宮内のいうように、この時期まで墓相はそれほど問題とされなかったようである。

日本独特の墓相説は、近世以降の関西地域で行われた無縁墓供養や「墓石磨き」実践を基盤として生まれた[11]。その嚆矢を放ったのが中山通幽[12]（文久 3- 昭和 11、1863-1936）であった。中山は、人々は自家の墓を建立する前に、祀り手のいない無縁墓の清掃・整理・供養の「陰徳積み」によって自らの罪障を消滅しなければならないと説き、明治 28 年（1895）に宗教団体「福田海」を設立した。中山は馬越恭平（大日本麦酒㈱社長、衆議院議員・貴族院勅選議員）、鳥井信治郎（サントリー創業者）、榊原亨（日本医師会副会長、参議院議員・自民党参院副幹事長）、小野市兵衛（小野薬品工業㈱社長）らをはじめ[13]、関西を中心とする社会的上層を信者としていたと考えられる。

『主婦之友』（昭和 4 年 7 月号）が中山のインタビュー記事「家運の盛衰と墓相の研究」を掲載している。記事は冒頭に「氏は、世人の誤解を惧れ、紹介のない人には一切面会を謝絶してゐられますが、氏の本義としてゐられる祖先崇拝の思想を、全国民に伝へんとする本誌の希望を容れて、京都嵯峨銀行の頭取小林義明氏御夫妻と令息美喜雄氏の特別な御配慮によって、快く記者を引見してくださいました」とあり、続いて中山による「福禄寿の墓」説が記載されている（年表・多田 1929：66）。管見の限り、この記事が日本における墓相のメディア初登場だが、中山がメディアに登場したのはこれが最初で最後であった。

その後、中山の弟子であった松崎整道[14]（元治元 - 昭和 24、1864-1949）が墓相の普及の中心となる。松崎は大正 14 年、「墓洗い」や、無縁塔の建立・供養、地蔵尊奉流、百万遍数珠繰りなどの実践を行う「功徳海地蔵講」を東京で結成、のち同会は「徳風会（とくふうかい）」と改称して西日本を中心に展開した。「墓洗い」とは、全く他人の墓地を訪れ、全ての墓と墓地内を洗い清めて榊や線香などを手向ける「功徳積み」の実践である[15]。

中山や松崎の活動の中心は無縁墓供養にあり、そのため彼らはしばしば仏教社会事業家や社会奉仕活動家としても位置づけられるが、その教えのなかでは墓相も大きな意味をもった。特に松崎は昭和 5 年、品川大井の天台宗寺院で開催された各宗聯合大井仏教會の会合で墓相の講演をしており、その内容が墓相書の先駆といえる『お墓と家運』（年表・松崎 1930）として刊行され広く普及した。小林康正が指摘するように、同書は、自家の墓に何かする前にまずは他者の無縁墓供養などの功徳積みを行うべきで、さもなくば災禍

が起こると強調していること、また墓の新設というよりは整理に重点が置かれていることを特徴としている[16]。このように松崎は中山による秘伝的な無縁墓供養と墓相を東京に持ち込み、普及させる役割を果たした人物といえるが、しかし墓相が東京で受容され定着するためにはもう一段階の変化を要した。

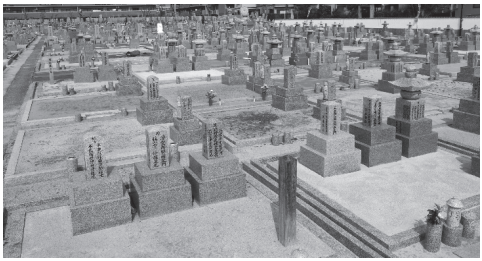


図2　徳風会系の「吉相墓」
（京都市･上桂霊苑において平成28年問芝撮影）

（2）墓相書ブーム

年表からは、先述の中山通幽による『主婦之友』記事（多田道幽名、年表･多田 1929）[17]および松崎整道による『お墓と家運』（年表・松崎 1930）を皮切りに、多くの墓相家が世に現れ、墓相書を相次いで刊行するようになり、昭和 11 ～ 14 年頃に出版のピークを迎えるという流れを確認できる。そしてその出版は特に矢島俯仰、今井鴻象、鹿島大賢といった東京在住の墓相家によるものが多いことがわかる。彼らは単独、または少数名での結社によって、墓相書の刊行や講演会の開催により集客し、個別相談に応じて鑑定料をとるという活動形態をとった。

それらの墓相書では、無縁墓供養実践についての記述は皆無か、少ない。『墓相と家運』（年表・今井 1936）の新聞広告から理解されるとおり（図 3）、自家にとって不幸を招く墓とはどのようなもので、それによりもたらされる災禍とは何か、逆に「正しい墓」すなわち家を繁栄させる「吉相墓」とは何かという内容が中心となっている。

中山はもともと「陰徳主義」として教えや実践を一般に広めるのを嫌い、また無縁墓供養の実践を最重要視して宗教団体を結成した。しかし、昭和初期の東京において、書籍等を中心として説かれた墓相は、中山や松崎の考えとは大きく異なり、自家の「吉相墓」を建てるという点に特化したブームであった。


今井鴻象著
墓相と家運
墓相による現實生活の一大事！戦慄すべき此の恐るべき事實を見よ
墓相上正しい墓の建て方を認識し誤れる墓制の崇禍を今防止せよ！
墓を建てる方は一寸お待ち下さい
家運の盛衰を左右する墓相の神秘
家運を護る聖典

図3　『読売新聞』1936 年 6 月 23 日

3　ある神道系墓相家の遍歴

（1）矢島俯仰の位置づけ

以上に見たような東京における墓相の流行を担った墓相家はどのような人物であったのか。彼の説く墓相とはどのようなもので、それはどのようにプロモーションされたか。本稿では、矢島俯仰（やじまふぎょう）（明治 31-昭和 45、1898-1970、図 4）という墓相家を取り上げ、文献調査ならびに彼の後継者である 2 代目（昭和 19-、1944-）への聞き取り調査[18]をもとに、彼が著名な墓相家として成功した過程を跡付けていく。



図 4　矢島俯仰（撮影年不明、［矢島 1970］）

もちろん、墓相家たちの経歴は多様であると考えられ、なかでも神職から墓相家に転身した矢島は特に異色かもしれない。しかし矢島は、草創期から戦後にかけて活躍した代表的墓相家の一人であったことと、自己流の墓相を書籍や講演によって宣伝し相談に応じるという方法を決定づけた東京在住の墓相家の一人であったことから、墓相の変容の契機を明確にするうえでの格好の対象といえる。

矢島の著作を読む限りでは、彼の墓相は中山や松崎の影響を大いに受けているようにみえる。しかし 2 代目によれば、彼らは師弟関係どころか面識も無かったという。墓相家を名乗るのに特別な修行や弟子入りは不要であるため、矢島と同様に「墓相学の始祖」を名乗る墓相家は大勢おり[19]、また逆に有名宗教家や墓相家のもとでの修行経験をアピールする者もいた。先行する墓相家の書籍や講演の内容などを無断借用したり、正統な継承者を名乗ったり、お互いに批判しあったりしながら、それぞれがオリジナルを称する○○式墓相学が形成されていった。

（2）墓相家となるまで

矢島は本名を矢島武二という。明治 31 年（1898）、麻布十番にあった末広稲荷神社に生まれ、幼少期に代々木八幡宮へ養子に入った。大正元年に麻布中学に入学、のちに國學院大學で考古学の教授となる樋口清之と知り合う。大正 10 年に國學院大學を卒業し、千駄ヶ谷の鳩森八幡神社で宮司職に就いた。この頃から矢島は自己流で鎮魂帰神法による託宣や易を始めた。2 代目

によれば、神社境内で託宣を行ったり墓相を説いたりする神職矢島の姿は、必ずしも評判のいいものではなかったという。

大正 14 年（1925）、矢島は応神天皇陵への参拝をきっかけに古墳と神社の関係という問題に関心を抱くようになった。さらに昭和初期には実の娘を亡くしたことで、墓はどのように建てるべきかとの問いが生じ、墓相の研究を開始するに至ったという。昭和 5 年、矢島は自身初の墓相書『墓相と運命』を刊行した。同書には「墓相鑑定料金十円以上」との記載がある（年表・矢島 1930）。またこの頃には託宣や祈祷、易、そして建墓事業を行う団体「鳩巣房（きゅうすぼう）」を創立し、墓相の事業化を果たした[20]。鳩巣房とは、房主の矢島に加え、設計･工事担当、文書担当（墓内部に納める写経制作）、絵画担当（墓内部に納める絵画制作）、美術金属担当（写経と絵画を入れる経筒製作）の 5 名からなる同人的な団体であった（昭和 8 年時点）。

以上のことから、矢島が墓相家となった背景には、易や鎮魂帰神といった神秘的事象への関心をもともと持っていたことや、愛娘の早世という個人的契機があったことが推察される。加えて、次の言葉からは時代社会的背景をうかがうことができよう。

> いつも不可思議なのは「常識」を頑冥に固持して、ロジツクを尊重してゐる人間が、何故に「墓と葬」の問題に対しては、何等の疑怪なしに終始傍観してゐるのであらうか？　どうしてもつと猪突的に、その奥底を掴うとしないのか？…惟ふに、その原因の一つは建墓に対する一定の基準が無いからである。故に斯に私の所論の帰趨を明確にして、以て「昭和の墓制」を確立し制定せんとする大旗を翻して、本書の出版を敢てしたのである。[21]

ここで動機として語られているのは、「建墓に対する一定の基準が無い」ことへの問題意識である。確かに関東大震災以降の東京では、一方で多磨や八柱といった広大な霊園が定着しつつ、他方で寺院墓地においては改葬が容易で省スペースな、コンクリート製の納骨室を内蔵したカロート式墓制が急速に普及を遂げており、まさに東京市政府主導によって近代都市墓制が成立していく途上にあった[22]。政府が構想した新しい墓制を疑いなく受容してよいのか、という矢島の問題意識が読み取れよう。

（3）古墳の探究から墓相「学」へ

さらに矢島は次のようにも述べる。

> 「墓相学」に指を触れたのは、最初からこれを創始すべく企図されたのではなく、その動機は応神陵を機縁としてなされた「古墳と神社」との、学究的の素願から出発したのであつた…上代の古墳と原則の合致したものは吉祥に恵まれ、背馳するものは凶禍に襲はれてゐる現象の、終始一貫された不文律によつて此れ斯に「墓相学」が建設されたのである。自己の趣味…例へば古社寺建築や仏教美術に対する仏像、仏具等の芸術の鑑賞眼と、それ等を通じて感得した熱烈なる信仰観念、また如上の山陵古墳を駆け巡つての考古学と、各地の風俗習慣による民俗学、神道仏教の文献的研究とその思索、易道並干支等の運命学、霊媒による霊魂研究等がその主眼であるが、学生時代に徒に習得したキャメラまでが、墓の採集に役立つて（ママ）挿入写真の原画は、悉く私の手によつて撮影したのである。[23]

前項でみた矢島の「昭和の墓制」確立という発想には、天皇陵や古代神道史への「学究的」関心が重要な位置を占めたというのである。これは一体どのような意味を持つのだろうか。

先行研究によれば、大正期以降の神道界では墓や埋葬への関与に関する議論が再燃し、神葬祭の歴史や法制の研究、神式公葬の理論化、死穢の捉え直しの動きが起こっていた。その背景には、多くの戦死者の発生や、明治天皇の崩御、大正 15 年の皇室陵墓令の発布、昭和 2 年の大正天皇斂葬の儀（葬場殿の儀、大葬）といった一連の出来事があったとされる[24]。

まさにこうした気運のなかで、矢島は昭和 7 年（1932）ごろ「神葬研究會」の創立メンバーに加わっている。メンバーは在京の神職仲間である矢島（鳩森八幡宮）、柳瀬福市・飯森文晴（浅草神社）、吉田正順（三田八幡宮）、伊藤一郎（幡ヶ谷氷川神社）、鈴木一正（麻布末廣神社）、平岩満雄（代々木八幡宮）であった。高野義太郎なる人物もまた、「氷見郡大田村の車塚の山陵が、民有地となつて年々糞尿をかけられ崩壊されつつある事に恐怖の念が勃然と起つた」ことから、神道の墓や葬祭という問題に強い関心を抱き、「葬祭一元論」ないし「社墓一元論」、すなわち「神社は墓所なり神職は墓守なり」とし、神社と墓を古代的原形へ回帰させるべきと提起する言説に共感して、古代の墓制や古墳の探究という志向が生じたと述べている。こうした思想は

神道界から冷淡視されたが、一部には信奉されたという（年表・高野 1932：1、68-70）。

こうした論理から、西洋式や中国式でない、日本古代民族固有の葬墓制を明らかにし、それを日本人のあるべき葬墓制として確立させようとの考え方が展開していく。矢島もまた、仏式葬儀は古代民族の精神が融和し構成されたものだから、検討対象とすべきは単に神葬祭ではなく「神仏両道の源泉」であると主張し、もともとの建墓観念を異にする欧米や中国の模倣ではない、日本民族精神における崇祖観念をあらわす建墓を目指すとした（年表・矢嶋 1933：156）。とはいえ、日本人みなが古墳を建てるわけにいかない。そこで矢島は、上古の「精神」「原則」「神髄」に即した墓相として、五輪塔や梵字を重視した独自の墓相を提唱していくのである。

注目すべきことに、神葬研究會には鳥居龍藏、折口信夫、山本信哉、中山太郎などの民族学・民俗学・考古学者も加わっていた。会誌創刊号の巻頭は折口の講演録で、「我々は、すぐ支那の葬送を考へて、喪とか葬式とかいふことに当てるが、さうする迄もなく、昔から我々には、葬式或は人が死んだ時の物忌に就いての、固有の考へをもって居るのです」（年表・折口 1933：11）とあり、当時の民俗学的発想と墓相との親和性を見て取ることができる。矢島と五来重との親交を示す資料も存在している[25]。このように考古学や民俗学などと深く関わりながら「日本人本来の墓」＝「正しい墓」＝「家を繁栄させる墓」を同定していく発想は、神道系だけでなく仏教系の墓相家にも共有されていった。例を挙げれば、「わが大和民族には大和民族固有のお墓があり、そのお墓の象徴するところの民族精神は、発して忠君愛国の国家観念に凝り忠孝道徳の大信念と化してゐる」（年表・石原 1936：5）、「（過去の墓相書や口伝は）悉く支那流の説で純日本式のものは文献口伝にはありません。…日本式墓相は、旧古の墓地を実地に研究して其の要領を知らねばなりません…墓相には方位を考へる必要はありません」（年表・山田 1939：88）、「建墓作法は民族的郷土的風俗的現象を史的累推し、日本精神の神髄を認識崇拝的信仰供養の表現を正確にするにあります」（年表・加藤 1940：3）といったものがある。

昭和初期の墓相家が、東アジア式墓地風水に依拠することなく、「日本式墓相」を「学」[26]として追究しようとした背景には、上述のような「日本民族精神」意識が働いていたことが理解されよう。

4　墓相と出版刊行物

（1）墓相家としての活動

昭和5年（1930）から墓相家としての活動を本格化させた矢島は、昭和6年、矢島俯仰と名乗って『主婦之友』誌に2号にわたり寄稿した（年表・矢島1931ab）。この記事は矢島の名を大いに広めることとなり、昭和8～9年における墓相書の刊行へとつながっていく（年表・矢嶋1933；矢島1934）。図5のように新聞広告も活用して集客しながら、矢島は講演や鑑定、建墓指導のため全国を飛び回った。昭和12年には、旭川新聞社社長に招聘され、北海道内各所で墓相学の講演を行ったという。

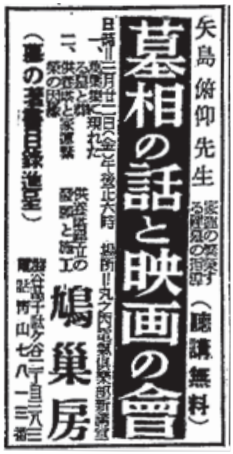


図5　『東京朝日新聞』1940年3月22日

倉田吉富は墓相学の大家として中山（岡山）、松崎（東京）、矢島（東京）、村田天然（大阪）の4名を挙げている（年表・倉田1936：20）。また、島影盟も「（墓相家の）中でも、知識的に実際的に積極的な活躍をしてゐるのが矢島俯仰で、歴史公論誌上に度々墓相を論じ…著書と共に機関紙として『建墓作品録』を発行し、猶、建墓の指導と施工をも行つてゐる」と記している（年表・島影1936：3、原文ママ）。この時期、矢島はすでに墓相家としての地位を確立していたとわかる。

矢島が説いた墓相の概要を、『墓相より観た 墓の建て方』（年表・矢嶋1933）からみておこう。矢島は、祖霊や迷える霊魂を正しい墓と祭祀供養で成仏させることで、家運の興隆を招き、災禍を防ぐことができると主張する。墓は霊魂の安らかな寝所であり、墓の本願は供養である。間違った建墓、不十分な供養は霊魂の成仏を妨げる。苦悩する霊魂は現界の血縁者に訴えてくるため、家運の衰退や家族へのタタリをもたらす。墓相学は、実在的な証左にもとづく形而上学であり、吉凶を如実に摘出することを目的とするという。では具体的にどのような墓が良いのかというと、あまりに多くの条件が挙げられているが、入口を東南にし、柵を設け、全体に日光が直射するもの、夫婦を合葬したもの、平安期の古式にのっとり層塔か五輪塔を建て、内部に納経したものだという。分家が新しく墓を作るときは本家の供養塔も建てるべきだという。そうした良い墓とは図6のような形状となる。一方、凶相なのは異形の墓、自然石の墓、コンクリートの墓、先祖より大きな墓、木や草が鬱蒼とした墓、苔の生えた墓、倒れたりひびの入ったりした墓などである。

層塔か五輪塔を中心に据えることを除けば、矢島式墓相も他の多くの墓相家の教えとかなり類似している。

また、墓には家の歴史が記録されているのと同様に、現在から未来への家運が暗示されるため、墓を見ればこの家の主人は○○で死んだとか、現在や未来に起こる不幸を言い当てられるという。そこで矢島は有名人の実名を挙げながら、○○寺の○○氏の墓は凶相なので実際に○○という災禍が起こったとか、その墓を正しく直したら運命が好転したというような事例を挙げてみせる。こうしたいわばゴシップ的な逸話が、講演会や書籍で人々を引き付ける要素の一つになったのであろう。



図6　矢島式墓相にのっとった墓
（鎌倉市・鎌倉霊園において平成28年問芝撮影）

（2）墓相のメディア展開

中山通幽の『主婦之友』記事がほとんど文字ばかりの記事で、イラストは1点のみであったのに対し（年表・中山1929）、翌々年の矢島の記事は写真を合計30点、イラスト2点を用いて墓の吉凶を逐一解説しており（年表・矢島1931ab）、誌面の印象が全く異なる。単著にも写真が多用されている。矢島は写真を趣味としたが、写真は墓の事例収集に役立つのみではなく、書籍・雑誌などの出版刊行物を活用して自身の墓相学を効果的に広めるうえで、視覚的にわかりやすく、注目を集める意味でも大いに役立ったと考えられる。

矢島は、写真を多用した出版刊行物により衆目を集め、広く集客し、希望者には個別相談に応じて鑑定料をとるという方法を確立した。他の墓相家も同様の方法をとるようになったことで、無縁墓供養の教説は後景化する一方、わかりやすく、人々の不安をあおるような言説と化した墓相が世間に広まっていったと考えられる。それは、教えを表立って広めない「陰徳主義」の中山とは、方法的にも内容的にも異なるものであった。

ここには、近代において前景化した、墓というモノの特性が関わる。その一つは、明治民法により、墓は家が所有し相続する祭祀財産と規定されたことである。墓の規模や装飾、管理のされ方が、その家の状況を如実に反映してしまうこともあっただろう。もう一つは、近代日本における「見られる墓」

の誕生、あるいは墓自体のもつメディア性とでもいうべき側面である。人口が増加し移動も増大する近代都市東京において、墓は公共の場で不特定多数の衆目に晒し置かれるものとなった。まして墓相書に写真などが掲載されるとなれば、さらに多くの人々に見られる。矢島らが有名人の盛衰を引き合いに出して自説を述べた背景には、こうした墓の特性がある。そもそも合理的に考えれば、家の衰退が原因となって、墓の無縁化や手入れ不足という結果が生じるはずである。しかしその逆に、凶相の墓を建てたり墓の手入れを怠ったりすることが原因で、墓が無縁になる、すなわち家が滅びる結果となるのだと墓相家らはいう。因果関係を逆転させたこの発想は、墓の可視性から生まれているといえよう。墓というモノは先祖の祀られ方を可視化するばかりか、「家の運命」なるものを誰の目にもわかりやすい視覚的情報として示すメディアとなりうるのであり、そのことこそが墓相を一般に広める大きな要因となったように思われるのである。

5　おわりに

以上、昭和初期の東京を舞台として展開された墓相が、それ以前の墓地風水や民衆的霊供養文化から変質した要因の一端を、矢島俯仰という一人の墓相家[27]を取り上げることで考察してきた。

墓相は矢島のような教団組織を有さない周辺的宗教者によって広められたが、そこで重要な集客ツールとなったのは雑誌・書籍などの出版刊行物であった。そこで一般読者の好奇心をさそい、建墓についての疑問だけでなく、家の永続をめぐる不安な心情をあおるために、墓相は創始当初の意向とは異なったものに様変わりしたといえる。また、墓相には「日本古来」の「正しい墓」の追究という一面があったこともみてきた。

加えて、墓自体のもつメディア性を指摘した。近代都市における公共の墓地という舞台で、また出版刊行物のなかで、墓は先祖祭祀を可視化する媒体としての意味をますます強めた。そのことが墓相の流行をもたらす一因となったと考えられる。こうした展開を、近世以前の民衆宗教が近代において変容を遂げた例として位置づけることも可能であろう。

墓相の普及における、当時の墓制度やクライアント側のニーズとの関わりの問題については、別稿で論じたい。

年表

昭和 20 年までに刊行された墓相関連書。原文を入手し内容を確認しえた文献には○印、墓相を批判したものには※印、東京在住の墓相家には下線を付した。

文政 3　1806	○高田（小山田）與清『墓相小言』『墓相或問』須原屋茂兵衛出版
明治 27　1894	○平沢白翁『家相千百年眼 巻之下』岡島宝玉堂
大正 13　1924	○目黒玄竜子『家相真髄――実験必中』帝国人相学院
昭和 3　1928	村田天然『墓相極秘秘傳書』私家版
昭和 4　1929	○多田道幽「家運の盛衰と墓相の研究――祖先の墓を祀れ！墓を軽んずる家は必ず滅ぶ！」『主婦之友』13（7）
昭和 5　1930	○松崎整道（述）『松崎整道居士講演 お墓と家運』森江書店
	○矢島武二『墓相と運命』出版社不明
昭和 6　1931	○矢島俯仰 a「家運の繁栄する墓と衰微する墓――墓を重んぜよ!! 家運の繁栄は祖先の墓より生る!!」『主婦之友』15（7）
	○矢島俯仰 b「家運の栄える墓と家運の衰へる墓――凶い墓相はどうすれば吉い墓相に改めることができるか？」『主婦之友』15（9）
	○神葬研究會、飯森文晴編『神葬研究』1
	村田天然『墓相の神秘』出版社不明
	○高野義太郎『神道とお墓』皇典社
昭和 8　1933	○高島易学研究会『運気判断 易典 附墓相の神秘』博潮社書店
	○矢嶋俯仰『墓相より観た 墓の建て方』鳩巣房
	○花見江南『神秘叢書 墓と家運の盛衰 附・陰徳の積み方』霊相学舎
	○矢嶋俯仰『家運の繁栄する墓と衰微する墓』鳩巣房
昭和 10　1935	○市原広界、藤澤衛彦校閲『建墓と墓相の研究 附・墓相小言』古今稀書刊行會
	○矢嶋俯仰「墓の建方」「墓と性」『歴史公論』4（7）
	○矢嶋俯仰「災禍凶殃の墓相」『歴史公論』4（8）
	○松風庵主『墓相学提要』私家版
	○松崎整道述、佐野熊翁編『松崎整道先生講話 お墓の話』清道会
	○村田天然『家運盛衰 墓碑相の研究』博潮社書店
	○森山巖雄『墓相と姓名』仙盟閣出版局

昭和11　1936	○※椎尾辨匡「新興宗教批判」佛教社會學院編『新興類似宗教批判』大東出版社
	○※島影盟『墓相と心霊問題批判』大東出版社
	○※島影盟・広木勇郎『現代人の観たる擬似宗教の真相』大東出版社
	○雄山閣編輯局編『墳墓の研究』雄山閣
	○石原研晶『お墓と人生』私家版
	○今井鴻象『運命学大成 第4巻 墓相と家運』東学社
	○鹿島大賢『開運の第一 お墓の建て方』會通社
	○倉田吉富『墓相研究書』私家版
	○平野増吉、松崎整道校閲『日本精神とお墓――お墓と家運』雄風館書房 森江書店
	○凡行史述『お墓が語る家運の盛衰』尭風書院
	○川舟喜太郎編『松崎整道先生講演 家運とお墓』徳風会
	○村田天然『家運繁栄 墓相の研究』博潮社書店
昭和12　1937	○今井鴻象『神道佛式墓相図解 お墓の建て方』東学社
	○水谷瑞甫講述、廣島德風會編『正しき墓の建て方』廣島德風會事務所
	○村田天然『家運盛衰 墓相と家運の研究』大阪博潮社
昭和13　1938	○鹿島大賢a『開運と墓相――お墓を直して運が開けた話』會通社
	鹿島大賢b『大運の掴み方 寫経と供養 お墓の直し方』會通社
	鹿島大賢c『開運を計かる お墓の立て方直し方』會通社
	加藤友康『追善供養の心得――供養より建墓まで』東学社
	○松崎整道『お墓と家運――墓は家の根であり相続のものである』森江書店
	村田天然『墓相の吉凶と家運』日本仏教新聞社

昭和14　1939	今井鴻象『運命学大成 第4巻 墓相と家運 訂正増補版』
	○鹿島大賢『遺族よ墓は斯う立てよ』會通社
	○加藤友康『神道佛式 墓相教典』東学社
	○熊崎健翁『五聖閣神秘運命總鑑』五聖閣
	○小森泰貫『墓相正論』堯風書院
	○山田照胤述「手相・人相・骨相・家相・墓相」遠藤隆吉監修『易學院講座』1-10
昭和15　1940	○加藤友康『御墓の建て方――敬神崇祖』川崎書店
昭和16　1941	○花見江南『迷信を超えて真理へ 附・神秘実験録』霊相学舎

参考文献一覧

石井研士・藤井健志 1988「新宗教における墓・葬儀の問題」藤井正雄編『仏教民俗学体系4 祖先祭祀と葬墓』名著出版

井上安元 1941『墓地経営』古今書院

前島康彦編 1973『井下清著作集 都市と緑』㈶東京都公園協会

何彬 2013『中国東南地域の民俗誌的研究――漢族の葬儀・死後祭祀と墓地』日本僑報社

観象学人 1977『知っておきたい お墓の話』高島易断所本部神宮館

小林康正 2011「都市をコーディネートする――無縁墓をめぐる「墓相家」の実践を中心に」『人間学部研究報告』12

小林康正 2012「墓相家・松崎整道の活動とその周辺に関する一考察――仏教出版ネットワーク、地蔵流しなどを中心に」『人間学部研究報告』13

対馬路人 1993「日本の墓相学」藤井正雄ほか編『家族と墓』早稲田大学出版部

対馬路人 1996a「福田海」「中山通幽」井上順孝・対馬路人・西山茂・孝本貢・中牧弘允編『新宗教教団・人物事典』弘文堂

対馬路人 1996b「墓相学の普及」川村邦光ほか『聖と俗のはざま』東方出版

露木まさひろ 1993『占い師！――ココロの時代の光と影』社会思想社

土居浩 1998「〈石化した葬墓地〉と違和する遺体――石塔・自然葬・死体遺棄をめぐる風景」『江戸の思想』9

土居浩 2004「近代日本における他者の墓地をめぐる言説と実践」『宗教研究』339

土居浩 2005「1930 年代、墓をめぐる実践が逆照射する仏教概念」『宗教と社会』11
土居浩 2006「〈墓地の無縁化〉をめぐる構想力――掃苔道・霊園行政・柳田民俗学の場合」『比較日本文化研究』10
中山通幽尊師の一代とその思想刊行会 1971『中山通幽尊師の一代とその思想 第二巻 墓と家と人』福田海本部
中山通幽尊師の一代とその思想刊行会 1974『中山通幽尊師の一代とその思想 第一巻 福田生』福田海本部
平崎真右 2014「近代社会事業としての墓石整理を考える――「福田海」の位置づけを巡って」『二松学舎大学人文論叢』93
福田海本部教学部編 1985『福田海の教え』福田海本部
藤田大誠 2014「近代神職の葬儀関与をめぐる論議と仏式公葬批判」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』8
墓地墓石研究会編、藤井正雄編集代表 1981『墓地墓石大事典』雄山閣出版
道端良秀 1977『墓と仏教――その歴史と墓相批判』百華苑
宮内貴久 2006『家相の民俗学』吉川弘文堂
森岡清美 1984「骨の供養と霊の供養」曹洞宗宗勢調査委員会編『宗教集団の明日への課題――曹洞宗宗勢実態調査報告書』曹洞宗宗務庁
矢島俯仰 1970『墓相――正しいお墓の建て方 No.9 増補』清山房
渡邊欣雄 1990『風水思想と東アジア』人文書院

注

(1) 近世以前の墓相と区別して「近代墓相学」という場合もあるが［観象 1977：69-71；墓地墓石研究会編 1981：364-366］、一般に墓相といえば昭和以降のものを指すため、本稿では単に「墓相」ないし「墓相学」という。墓相についての説明は、［対馬 1993；対馬 1996b；露木 1993：403］も参照。

(2) 各墓相家が指導する墓は、「吉相墓」、「善い墓」、「理想的な墓」、「模範的な墓」など、さまざまな表現で記されている。「正しい墓」という表現も随所にみられ、中山通幽をはじめ、矢島俯仰、今井鴻象、鹿島大賢などが用いている。

(3) ［渡邊 1990；何 2013：224-241］。

(4) 対馬路人は日本の墓相学を「地形中心主義」ではなく「墓塔中心主義」であると述べている［対馬 1993：292］。

(5) たとえば椎尾辨匡は、姓名判断、方位・日柄・年回り、ひとのみち、生長の家などと並べて墓相学を批判している。椎尾は墓相学について「現今、最も有産階級をおびやかすもの」であり、「有産有閑人の不安感を襲ひて利得せんとする奸手段と評せらる」と述べている（年表・椎尾 1935：41-43）。ジャーナリストの島影盟も、「心霊学の流行に乗じた墓相の勢ひは当るべからざるものがあつて、家相の本などでも別に項を設けて墓相を力説するといふ現状が、一般大衆の関心を強めてゐることは非常である」と述べている（年表・島影

1936：3)。特に戦後、墓相は多くの批判を受けた。仏教学・仏教者の立場からの墓相批判として[墓地墓石研究会編 1981；道端 1977]などがある。

(6) [対馬 1993：297]。

(7) [土居 2004；土居 2005；土居 2006]。

(8) [対馬 1996a；小林 2011；小林 2012；平崎 2014]。

(9) 霊友会系新宗教は「骨の供養は寺で、霊の供養は自分たちの手で」と説き、墓への関心は高くないとされる[森岡 1984：345；石井・藤井 1988]。

(10) [宮内 2006]。

(11) [土居 1998；土居 2004]。

(12) 文久 3 年岡山県生まれ。小学校教師、修験道の行者、易者などを経て、明治 28 年、福田海の前身である「無縁法界講」を結成。明治 28 年、中山は大阪の飛田墓地で石工が古い墓石 300 基を破砕しているのを目撃した。聞けば四天王寺の命とのことで、同寺へ抗議したところ、墓石の処置一切を託された。それから中山は無縁墓の清掃供養を宗教実践の中心とするようになり、京都の化野念仏寺や滋賀の石塔寺などで、生涯で 20 万基の無縁墓を供養したとされる[中山通幽尊師の一代とその思想刊行会 1971；同 1974；福田海本部教学部編 1985；対馬 1993；対馬 1996a；平崎 2014]。

(13) [中山通幽尊師の一代とその思想刊行会 1974]、「序に代えて」。

(14) 埼玉県上尾出まれ。明治 30 年頃より小樽で事業に携わるなかで宗教的探求心が目覚め、大正 7 年頃に中山の教えに強く惹かれて一時弟子入りし教示を受けた。大正 8 年、居を東京に移して墓の研究を開始した[小林 2011；小林 2012]。

(15) (年表・川舟 1936：95-98)。大阪徳風会は昭和 6 年頃創立、昭和 11 年当時で会員数 1,500 名にのぼる団体であり、毎月 1 度大阪市内で「墓洗い」を行って 5 年で市内全ての寺と墓地を一巡したという(年表・平野 1936：211)。

(16) [小林 2011：64-65]。小林は、松崎による無縁墓整理・供養の言説を、当時における東京の深刻な墓地問題、特に関東大震災復興や墓地法の不備の問題から無縁墓のずさんな整理や投棄が横行していたこととの関連で論じている。重要な指摘だが、しかし小林も断っているとおり、徳風会系墓相は大阪や広島など西日本に広く普及したのに比べ、東京での普及は限定的であった。その理由を即断することはできないが、徳風会系墓相が東京の墓制と不整合であった可能性は指摘できる。東京では関東大震災を契機として、改葬が容易で省スペースなカロート式墓制が急速に普及した。しかし徳風会系墓相は、子が親の墓を建てるべきとの考えから、各代ごとに夫婦墓や個人墓を並べて建てていく形態をとり(図 2)、「先祖代々墓」や「家之墓」としてカロートへ合葬することを厳しく否定する。こうした形態を当時の東京で実現することはかなり困難だったのではないか。それは、松崎が東京のような都会の地での建墓に否定的であったことからもうかがえる(年表・松崎 1930：47、56)。

(17) 「短いものとは言え、当時の世間にかなりの影響を与えたもので」、「これを境に奇貨居くべしとなし、本家、宗家顔した墓相屋が続出して数種の本が売り出された」[中山通幽尊師の一代とその思想刊行会 1971：208、331-332]。

(18) 文献は[矢島 1970]および(年表・矢嶋 1933)を主に参照した。聞き取り調査は平成 27 年 12 月と平成 28 年 4 月の 2 度、計約 7 時間の面接によって実施した。

(19) たとえば村田天然は、自分は昭和 3 年の段階ですでに墓相研究の原稿を主婦之友社へ送付し、かつ墓相書を全国の宗教家らに頒布して輿論を喚起していたといい(村田 1935：18-19)、また「大日本墓相研究会 会長」を自称する倉田吉富も、昭和 2 年頃から研究を開始し、昭和 5 年頃から各所で墓相の講演をして輿論を喚起したと主張する(倉田 1936：4-5)。これらの主張の真偽はどうあれ、少なくとも同時代の墓相家が墓相の草創を昭和 4 年頃と認識していたことがわかる。

(20) なお今井鴻象は昭和 11 年の著書で、矢島を「墓相学を営業化し、矢島式墓相の墓など

と銘打って、墓作りを一種の専売特許扱ひにしたり、ブルジョアの道楽にはもつてこい式の高価な供養塔を製造販売したりしてゐる」と批判している（年表・今井 1936：160）。

(21) （年表・矢嶋 1933）、「まえがき」。

(22) ［井上 1941；前島編 1973］。

(23) （年表・矢嶋 1933：168-169）。

(24) ［藤田 2014］。

(25) この件は土居浩氏よりご教示いただいた。

(26) なお今井鴻象は「墓相は決して学問ではない、ただただ実地の研究上割り出された運命観であります」と述べているが、これは、墓相は理屈ではどうすることもできないもので、実際の吉凶という「雄弁に物語る範例」に従わざるをえないという意味である（年表・今井 1936：285）。

(27) 戦後の矢島の経歴は概略のみ記す。終戦直後、矢島は個人的な事情により京都に移住、昭和 23 年からは山田桃花と名乗って上賀茂神社の代宮司を務めたが、また事情により昭和 30 年頃再び上京した。この間の諸問題で神社界と縁が切れた矢島は、親族が東京国分寺で開教した新宗教「神光教」と関わりつつ、易や祈祷、特に墓相によって生計を立てたという。昭和 30 年代には墓相書を次々と刊行し「昭和の両墓制」を提唱した。この両墓制というタームが民俗学に由来することは言うまでもない。昭和 41 年には西武グループが経営する鎌倉霊園との提携を成立させ、テレビにも出演した。同じ頃、ある有名作家の妻が矢島の熱心な信者となり、その知人関係を中心とする小さな宗教集団が結成された。昭和 42 年、矢島は神道大教の紹介を得て、鎌倉に教場「参霊会」を開設、教会長として教会活動を開始したが、昭和 45 年に 72 歳で死去した。現在は子の守雄が後を継いでいる。

（といしば・しほ　筑波大学大学院一貫制博士課程
人文社会科学研究科哲学・思想専攻）